

現会員思い出を語る

—美歯会の50年の歩みのなかで—

創立50周年に想う	宝崎 錠二
道歯会通信の思い出と今度こそ会史を	雨田 実
一女性歯科医として	宝崎 幸子
思い出の中から	扇谷 明典
父 桜田巳年二を想う	桜田 昭美
開業当時の思い出	小森 英世
美唄の歯科界に知己多し	大坪 義和
美唄での開業をふりかえって	孫 泰一
出身は美唄です	吉村 治範
変動の10年	前山 善彦

創立50周年に想う

宝 崎 錠 二

新制社団法人美唄歯科医師会創立50周年にあたる、この大きい節目に、会長職にあると言う事は、神のご指示と受止め、心から喜び光栄に思う者であります。

この記念誌発刊に到る思いは、先に述べたので重複を避けますが、関係者のご助言又資料等を整理していく中で、この50年の流れは大きく、何度も立ち止り、さらなる草創の時に至っては、もはや知るすべもなく、ただただ天を仰ぎ、明治大正に思いを馳せるのみとなりました。しかし、その中にあって、雨田実先生を中心に編集委員長のご努力の結果、霧の向こうが少しく見えたように思います。今後この足跡が役に立つ時がきっと来るものと期待をしております。

何時の時代でも、歯科の正業に生きた者は、医療の変遷に沿ってそれなりの努力をし地域住民の歯科医療に貢献して来たものと信じないわけには参りません。

戦後の日本石炭産業の盛衰と、当美唄市の変貌は、まったく軌を一にして参りました。一時は9万人を越える人口も、エネルギー革命のあおりを受けて相つぐ閉山の結果、昭和48年には全炭鉱を失い現在では3万を割ろうとしております。当然歯科医師の数も大きく変動し、多い時で25名の会員が15名に減少しておりますのもやむをえない事かと思えます。この小人数で社団法人を維持して行くには、会員全員が役員となり、与えられた役割を再認識しお互いが仲よく健康で明日へ向かって前進して行くことが重要かと考えます。

五十年前の歯科医師会は、自分の診療所に来院する患者の治療と学校歯科検診等が主な仕事であったかと思いますが、近年特に、この2、3年前から歯科界を取り巻く状況は大きく変化致しました。国の政策が市町村に移管され、保健所の再編制と共に歯科保健に関する業務が急激に多くなって参りました。1、5才児、3才児検診、フッ素塗布等は、すでに当市に於ては実施されておりますが、介護

保険法にともなう老人歯科保健、障害者歯科診療、在宅歯科診療と、どれを取っても重要な問題が山積されております。今後市と十分協議し対応して行かなければならないものと考えております。

平成10年7月1日には、美唄市と歯科医師会との間で災害時歯科医療救護活動に関する協定書の調印も行なわれ、警察歯科協力医会とともに、一旦緩急ある場合には多くの会員のご協力を頂かなければなりません。

新制歯科医師会となって以来、このように会員の負担が大きくなった時代はなかったと思いますが50年を一区切りとして、地域における社団法人の役割を果たす為に、会員一人一人の絶大なるご理解とご協力を切にお願いをし、住民のニーズに答えられる新時代に向けて再出発しようではありませんか。

最後に、本会発展にご尽力されました歴代会長、役員を始めとして、会員の皆様方に心から感謝を申し上げ、ご逝去された諸先生には、心よりご冥福をお祈り申し上げる次第であります。

道歯会通信の思い出と、 今度こそ会史を

雨 田 実

古きをたずねて

記憶にあやまりがなければ、小生が、道歯会通信に投稿を始めたのは、奇しくも道歯会通信が、第3種郵便物として、昭和37年12月27日に許可された頃で、昭和38年度当初の道歯会通信第155号からと思われる、道歯会長は石井先生、編集委員長は小林先生、副委員長は吉田先生であった。

懐かしい前の道歯会

その頃の道歯会は、カトリックの教会を思わせるような古式ゆたかな木造のものであったが、今となれば懐かしいものの1つであろう。

面白きかなその企画

昭和38年9月号、第163号に、道内郡市区会長を親しみをこめて語る（おらが会長）とい

う特集、年末の特集（1年をかえりみて）というタイトルの、郡市区会、専務理事の紙上座談会等楽しい読物であった（小生昭和36年入会して、翌年37年、専務理事に就任したので、当然その執筆もした）

保険の勉強もしなくちゃ

保険の広場という、昭和40年頃から保険部便りは、保険診療の（カンドコロ）を的確に伝えて余すところがなかった。その文章が特に素晴らしく、保険の勉強の他に、文章の勉強まで教えてもらえる楽しさで、毎月が待遠しかつたものであった。保険部の牛耳を執っていた、小樽の喜田先生の筆によるものと聞いている。（美唄歯科医師会、高橋常美、元副会長と東歯大の同級とも聞いている。）

1年1度の楽しい集い

日頃道歯会通信誌上でしか、お会いできない道歯会や郡歯会の編集委員の先生がたと、年に1度のことではあるが、一堂に集っての編集委員会は何にも増して楽しいものであった。現在は郡市区広報担当理事と呼ばれているが、その当時は、道歯会通信と書かれた腕章が各自に配布され、各郡歯会が新聞社流に支局の立場におかれ、編集委員は支局長として、腕章は、非常線通過許可証としたものであったと記憶する（1度もその恩恵にあやかる折がなかった事は、現在でも少しばかり残念である）。昭和47年の連絡協議会で、巻頭言（これは道歯会執行部が書くこと）ろんだん、読者の声、道歯人物伝（今はひと、ひと）と呼んでいる、ローカルニュースは、各郡歯会の最小の責任割当てと定められた。それまでは、人物伝と表紙の2つのみが責任であったものが、1度に多くの責任を負わせて、1年半程で必ず来るであろうと考え、担当理事諸公、胃の痛くなるような大英断の決定で、581号の現在も生きているからつらかった。

栄光よいつまでも

道歯会と会員を結ぶ、良きパイプとしての道歯会通信が、昭和46年、都道府県歯科医師会、広報紙コンクールに於て道歯会の数倍もの広報紙予算を使っている、大都市歯会を寄せつけずに、堂々と第1位の栄冠に輝いた。

われらの道歯会通信の益々の発展を祈念して止まないものである。

盛りだくさんな楽しさ

今の道歯会通信には載っていないけれど、健保漫談の渋い持ち味、つぶやき（雪虫太郎さん）の面白味、こんばんわ、なども楽しさはつきなかつた。別格のものとして昭和48年頃は自由詩とか短歌を載せていたものが昭和50年頃から、漢詩が裏表紙に毎月載せて頂いた。故道歯副会長の岩田先生の作品は、歯会の広報紙には異色なものとして、楽しませて頂いたものの1つであった。始めの内は、読みを入れて頂いていたが段々と白文になってしまって、読めないで大変に苦労したのを覚えている。ちなみに漢詩は白文で書くものであるそうです。（旧制中学時代もっと漢文を勉強しておかなかつたのを悔んだ）

ご苦労さまです

間もなく、600号が発行される現在までに培われた歴代道歯会々長さんはじめ、執行部の諸先生方、また裏方の仕事に、いつも、縁の下で尽力して頂いている事務局の方々には感謝の弁もありません。謹んでお礼申し上げます。今後とも宜しくお願い申し上げる次第であります。

迷文とはこのこと

40年近い才月を、良くもまあ、アキもしないで、とりとめのない拙文を乱筆で綴り、迷文とは、このようなものと汗顔の極みであり、文中に道歯会の先生がたの、お名前を無断で使わせて頂きました。御無礼を伏して謝するものであります。

60年前にも会史編纂の話はあったのに？

大正13年頃、北海道歯科医師会、空知支部会、美唄方面会が発会して、10年以上経過したであろう頃の、昭和10年頃、高橋常保方面会会長を始め、幹事の桜田巳年二先生、北野先生、扇谷重憲先生（美唄町会議員）月形の三浦先生、南美唄の扇谷一貫先生、我路の島田先生、小川辰之先生と多士済々で役者に不足はなかったと思われるのに、どうして会史が完成発行出来なかったのか？高橋先生が、お元気な頃であり、油ののり切った文学中年の

もとで、と思うと不思議でならない。会史を発行するのは、ヒマラヤに登るより難しいとも云われるが、それに比べれば、昭和38年度の場合は、途中で高橋常保先生が眼底出血で会史編集編纂会議に出席が出来なくなったほかに、各会員から原稿が殆んど集まらない有様で、あまり良い形容ではないけれど、船山にも登ることが再三であった時のほうが、はるかに難しかったと思われる。その時に比べれば、今回は随分と事態が異なると思われる。資料の点だけでも、前回とは大分異なる上に、宝崎歯科医師会会長が会史編集実行委員長であり、小森副会長の編集委員長がまた大変な熱心さをもって真摯に取組んで居り、大坪専務の微細な心くばり。裏方をいっ手に受け持って働いてくれる、桜田専務局長と。週一度の宝崎会長宅での編集委員会は、正に熱気ムンムンで、“今度こそわ”と意気さかんにして、何事も3度で成就するであろう。しかも、新しき酒は、新しき器にの言葉通りに、新会長のもと、恥ずかしくない会史の発刊を祈念してやまない。

一女性歯科医として

宝 崎 幸 子

女性の歯科医がいまだ希な昭和20年代前半の頃、美唄歯科医師会には会発足当時に我路に嶋田君江先生が父上の清司先生とご一緒に活躍されておりました。(昭和23年前期まで在籍)さらに、江頭ミサヲ先生が昭和26年から昭和38年の三菱鉱業所病院滝の沢分院が閉鎖されるまで勤務されておりました。

牛丸トシ先生は昭和33年から昭和47年まで我路市街で開業されていた夫君の博先生の片腕として活躍されておりました。

昭和60年に吾が愛娘長谷部(宝崎)めぐみが美唄労災病院歯科依託開設ということで平成元年3月まで在籍、その後同級生と結婚し今は三人の子供の子育て真最中です。

平成5年には吉村裕美子先生が入会、三人のお子さんの母親でもある先生は、今が子育て真最中で大変な中にも充実した日々を送っ

ておられます。歯科医師会に係わるこのような優秀な先生方と共に地域の歯科医療に携わることが出来たことは非常に光栄なことでありました。

昨今は女性歯科医の数もふえて参りました。女医は女性本来の天性ともいべきこまやかな気くばり、優しさを駆使して又母性本能も發揮して時には男の先生のようにその時々状況に応じて患者さんと相対することが出来るという特徴を生かすことが出来ます。

敬遠される歯科治療、患者さんは皆弱者であるということを常に忘れず取りくんで来ましたが、一般的な考え方として「女だからそう手荒なことはしないだろう。何でも話し易い、又、少々のことならがまん出来るかな」という気さくな受け取り方をしてくれているようです。

仕事をもつ女性が家事をやり乍ら子供を産み育て、又自分の仕事も責任者としてやっていくということは今考えてみてもそう簡単なことではありませんでした。そのことはとりもなおさず周りの皆さんの協力、ささえがあつての今日と思っております。振り返ってみればあつという間の出来事のようにも思えます。

私はサラリーマンの父の勤めの関係で札幌から豊原へ移住し豊原高女を経て昭和18年東洋女歯へ入学、昭和20年3月あの東京大空襲で学校は戦災全焼したため、学生全員一時帰郷し学校からの指令を待つため豊原へ、そこであの悪夢の8月15日を迎えました。玉音放送が終わるとすぐ父が「お前たちだけで北海道へ渡りなさい」と私が先頭で3人の弟妹を連れて命からがら美唄に引き揚げたこと。美唄は父の実家で農家、猫の手も欲しい秋の取り入れ時に学校から復学の通知がありました。父は「もう学校は辞めて働きなさい!」母は猛反対、「復学しないでどうするの!」と皆で何回も話し合って復学したのです。

昭和22年卒業、戦後マッカーサー指令部から歯科医師国試施行命令が出されたのが丁度私たちの卒業の年でした。学校では24時間教育の甲斐あつて第一回歯科医師国家試験無事合格。「すぐ帰れ!」の父の鶴の一声で美唄に

もどり父の知り合いの紹介で三菱美唄炭鉱病院歯科に勤務の後、昭和28年現在のこの地で歯科医院を開設いたしました。

美唄歯科医師会には立派な大老、中老、若年寄と居並ぶメンバーに事欠かない中へ女性として27才が独立開業するということにかなりの抵抗はありました。しかし当時は、若さと母のうしろ立てがあつて出来たことだと思っております。しりごみする私を「あんたは患者さんだけを診ていればいいんだから」と激励され、私は受付会計点数表に金額を入れて表にしたものを渡して診療に専念するという恵まれたスタートでした。母が経営者として、又家にあつては家事・育児いっさい全面的に協力を惜しまなかったことが大きな助けになりました。

勿論主人の陰の力も偉大で「オレはいつも縁の下の力もちだ」とばやきながらもかげにひなたに支えてくれたのは、いうまでもありません。

母はこことぞ云う時の決断の的確さ、復学の時、開業の時も母の決断があつたからでこの母なくして現在の私たちは考えられないといつても過言ではありません。

親が残していつてくれた家のまわりの風景、今も診療室の窓からみえる庭に患者さんの目を、又私たちの心をなごませてくれる木々のみどりが、そして花々が思い出を作ってくれています。又美唄の自然の美しさに感嘆し診療の合間につたない俳句を詠んでみました。今年は開院して45年、しみじみと当時のことを想起こし乍ら、亡き母が私に常々話していた「みなに優しくいつもおだやかな心を持ていなさい」という言葉に忠実にこれからも地域社会に恩返しをして行くということが大切なことと思っております。

母丹精 寒に咲かせし ^{スイセンカ}水仙花
ピンネ山 雪まだ深く 春を待つ
風にゆれ コスモスの空 真青かな
中庭のあじさい太し 診療す
カルテの上 風がもてくる ^{ワクラバ}病葉よ
ふきのとう 検診に來し 学校に
寒雀 ふくらみ朝の 枝揺れず

思い出の中から

扇 谷 明 典

私が美唄歯科医師会に入会したのは昭和33年7月大学卒業と同時で、といっても私は入会したのも知らず父が全て手続きをすましてくれたので、只々南美唄の診療所で朝から晩まで患者、患者の毎日だった。当時美唄歯科医師会では毎月第3木曜日6時頃だったと思うが月例会があつて保険診療の研究会その他を行っていた。会が終わって帰りにには皆一言も言わなくても親不孝通りにあるクラブに一直線。お酒は一滴ものめない先生が先とうを切って出かけ11時12時まで盛上がったものである。うわさを聞いた岩見沢や札幌の先生などが仲間に入れてくれとわざわざ美唄まで見えられた事もあった。あるときクラブの女の子が結婚の為、店をやめて砂川に行きそこでも同じ様なお店づとめと聞いて「よし」お祝いにいこうと女の子全員引きつれて砂川の店まで出かけたこともあったり、と古き良き時代を過ごして来た。感慨一しおである。

父、桜田巳年二を想う

桜 田 昭 美

昭和26年の会報よりの引用（口腔検診に当たりて）

陽春の候、雪が消えて懐かしい土が出ると、仕事も手につかずフラフラと外へ出て見たくなる。老眼鏡をかけエンジンを回す我々老生と言えども何となく若返って、若々しいネクタイを探し出してかけてみたり軽装にスプリングコートで、一寸旅行としゃれて見たくなる。

さて、世は全て活発な活動を開始しだした。特に農家は、その最たるものであろう。わが美唄歯科医師会にも、伝統の学童口腔検診が目前に迫っている。会の功労者高橋翁を始め新進気鋭に至るまで、そして中に紅一点も加えて今年も楽しい中にも真剣に、予防医学の一端を担う口腔検診に協力一致する事になった。